

連家船漁民の研究
—水・陸のはざまを生きる福建南部の水上居民—

歴史民俗資料科学研究科 藤川美代子

要約

本論文は、中国福建省九龍江河口で長年、船上生活をしてきた「連家船漁民」と呼ばれる人々の自己認識やエスニシティのあり方について、文化(社会)人類学的なフィールドワークに基づく資料から考察することを目的としている。

連家船漁民をはじめとする船上生活者は、現代中国では水上居民と総称される。従来の研究では、他の地域を圧倒する数の水上居民を抱える広東社会を取り上げたものが多くを占める。その中で、水上居民たちの特異な生活様式や、そこから派生する特異な民俗事象は、彼らが中国社会のマジョリティである漢族とは異なる非漢族であることに由来するものと捉えられており、彼らの特異性や被差別性の問題は往々にして「マジョリティの陸上定住者＝漢族／マイノリティの水上居民＝非漢族」という二項対立的な構図に立脚した上で描かれてきた。

本論文では、連家船漁民の人々と生活を共にするフィールドワークの中で得られた筆者自身の素直な感覚と、従来の中国水上居民研究との間に見られるズレを問題化し、大きな3つの課題として設定した。その課題とは、1)これまで、広東社会で蛋家と呼ばれる人々を主な対象として進められてきた中国の水上居民研究を相対化すること、2)広東社会を中心とした水上居民研究の中で見られる研究者たち自身の態度を相対化すること、そして、3)従来の水上居民研究において自明視されてきた、「水上から陸上へ」あるいは「移動から定住へ」という単純な図式を批判的に再考することである。論文全体は、第Ⅰ部「社会変化期を生きる連家船漁民」、第Ⅱ部「自己の位置づけを模索する連家船漁民」、第Ⅲ部「水上／陸上のはざまで」とに大きく分かれ、序章と結論を含めた全7章で構成される。

序章では、論文全体の目的と問題の所在を明らかにし、本論文が基礎とする調査の方法について概要を述べる。ここでは、上述したような中国の水上居民に関する先行研究と、世界の他地域に暮らす水上生活者たちに関する先行研究について、その状況を回顧し、本論文が水上生活者に関する研究史の中でどのように位置づけられるのかを明らかにする。

第Ⅰ部は、九龍江河口という小さな地域社会に暮らしてきた連家船漁民たちの全体像を明らかにすることを目的としており、後に続く章で取り上げる具体的な事例を理解するための背景ともいえる部分を占める。

第1章「連家船漁民とは誰か」では、福建省および福建省南部の沿海部や河において船で生活してきた人々が、研究者たちによってどのように位置づけられてきたのかを概観した後、九龍江河口に暮らしてきた、いわゆる「伝統的な連家船漁民」の姿を捉える。ここでは、現在、遡ることが可能な中華民国期の「以船為家」という言葉に代表される彼らの生活が、どの地域を中心にどのように営まれていたのか、連家船漁民出身の郷土史家たちの記した資料や档案

資料、フィールドワークの中で得られた聞き取りの資料により、その様子を再構成することを試みている。最後に注目したのは、連家船漁民をめぐる「名づけ」と「名乗り」の問題である。連家船漁民に対して農民や市街地の人々、そして陸地に住居を持つ一般的な漁民から投げかけられる「水鴨仔」(カモ)、「曲蹄仔」(足の曲がった奴)といった具体的な名づけと、「彼らは昔、とても貧乏で、本当に可哀そうだった」という語りから見えるのは、地域社会において、連家船漁民とは、マジョリティである陸上の人々とは異なる生活形態や身体的特徴を持ち、劣悪な経済状況にあるような集団として想像されているということである。これに対して、連家船漁民の側から発せられる「討海人」(漁をする人)・「掠魚人」(魚を捕る人)という名乗りからは、自らと他者との間には、生業形態の差異しか存在しないとする、他者が考えるのとはまったく別の連家船漁民像を導き出すことができる。その集団は、「山頂人」(陸の人)と総称されるところの農民や市街地の人々と対置されるものとして想像されており、陸地に住居を有する一般的な漁民をも含むことができるような範疇である。連家船漁民が発する討海人・掠魚人という名の範疇内部に自らが含まれることに対して、一般的な漁民は賛同を示さぬが、これは漁民のほうは、連家船漁民たちが見せるまったく別の特徴の集合を指標としながら、自らと連家船漁民の間に境界を見出しているためである。

広東社会の水上居民や福州の閩江河口の水上居民が多くの場合、「非漢族」あるいは「漢族性を著しく欠いた人々」として描かれるのに対して、九龍江河口に暮らす連家船漁民についてはそうした印象が導き出されることはほとんどないという状況は、研究者の側が、「見る者の名づけ」と、「歩く者の名づけ」のどちらに注目するかという差異を反映している。見る者の視点によって描き出された水上居民像が、どのような内容のものであれ、あくまでも水上居民ではない何か別の集団を際立たせるために負の意味を付与されることで成り立つような性格を持つ以上、それに呼応して水上居民の側から発せられる名乗りとは、きわめて受動的なものとして現れることになる。一方、地域社会の中で普通にしていっても耳に入ってくるような、歩く者によってなされる名づけと名乗りへと視点を移すならば、水上居民でない人々が想像する水上居民像も、水上居民自身が想像する水上居民像も、そして、水上居民たちが想像する他の人々の像も、すべて能動的な名づけと名乗りとして姿を現すことに気づくだろう。この見る者と歩く者という二つのレベルの名づけを区別せぬまま、地域社会の中からただ闇雲に「水上居民は非漢族である」、「水上居民は漢族性を欠いた人々とされてきた」という目立つ語りのほうだけを抽出し、それに対抗するような水上居民の名乗りだけに目を向けるのだとしたら、そこで描かれる水上居民像はひどく偏ったものとなる可能性を秘めている。

第2章 土地と住居獲得の歴史—集団化政策と定住化を経て—では、中華人民共和国成立後の共産党政権下において、連家船漁民たちが近隣の農民や市街地の人々とはほとんど変わらぬかに見える生活を手に入れていく過程に着目する。九龍江河口の地域に広がって、基本的には個々の家庭ごとに船で移動する生活を営みながら、漁や漁獲物の運搬などに従事していた連家船漁民たちは、1949年に中華人民共和国が成立すると、中国各地の水上居民と同様、いくつかの段階を経ながら集団化の道を歩んでいった。それは全体として見れば、数種類の同姓親族集団から成る「漁船幫」ごと、あるいは家族ごとに各地に分散しながら漁撈や

漁獲物の水上運搬に従事していた連家船漁民たちが、より大きな組織の中に組み込まれることによって、現在「Sm 漁業社区」として表される漁村の単位のおおよその形が完成してゆく過程でもあった。また、個々の連家船漁民へと目を向ければ、集団化政策や、その後の改革開放といった政策の転換は、土地を得て、そこに建てられた工場での労働に従事したり、夢にまで見た陸上の住居を獲得したり、はたまた自由に水上や陸上の職業を選択することができるようになったり、というように、生産や生活の様々な局面において、それまでのいわゆる「伝統的な」連家船漁民たちとは大きく異なる変化を経験した時期でもある。

集団化政策と住居の獲得を経て、連家船漁民と周囲の陸上の人々の間には、結婚をめぐる関係性などに変化が生じている。さらに、定住用地には造船工場や機械工場、編網作業場、編網作業場、麻袋工場、水産品加工場などが造られるようになり、そこで造られた機帆船で外海まで出て漁をするようになると、それまでの漁船幫の、どの同姓親族集団の、どの作業集団に属していたかは問題とはならなくなり、組織によって陸上や外海での漁の仕事に適していると認められた者であれば誰でも、それらの労働に従事するようになった。こうして、伝統的な連家船漁民たちの間で漁船幫の持っていた地縁的なつながりというのは、ほぼ完全に消失することになった。その一方で、ひとたび個々人の暮らしに眼を向けると、結婚を決める際にはかつての漁船幫同士のつながりを利用して相手を選ぶことが現在でも多く見られる。また、高価な鉄製の大型機帆船を購入し、乗組員を雇って台湾海峡辺りまで出漁するという機帆船経営に際しては、かつての漁船幫内部にあった同姓親族集団の中での関係を利用して協力しあうこともある。こうして、表面的には結合力を失ったかに見える漁船幫や同姓親族集団のつながりは、現在でも社会生活の根深い所で、連家船漁民たちの生活を支えている。

第Ⅱ部「自己の位置づけを模索する連家船漁民」は、一連の集団化政策や改革開放といったものに代表される国家レベルにおける社会の変容を経験し、その中で生活の拠点を陸上へと移した後の連家船漁民たちが、地域社会の中で自らをどのように位置づけているのかを検討してゆく部分である。長きにわたり船上生活を続けてきた連家船漁民たちは、九龍江河口という地域社会の中であって、生業・生活形態やその行動様式、身体的特徴といったものが見せる異質さを理由に、しばしば差別的な眼差しをとまねいながら、社会的・文化的マイノリティとして社会の周縁に位置づけられてきた。一生を船の上で過ごすという生活様式が過去のものとなった現在でも、とりわけ、連家船漁民たちが行う神明祭祀や祖先祭祀、葬送儀礼といった民俗事象の中には、周辺の農村や市街地に暮らす人々との間に差異が現れることが多い。そうした差異を、連家船漁民自身がどう捉えているのかを、彼らの側に寄り添う形で理解することが、ここでの最大の試みである。

第3章「祭祀活動に見る連家船漁民の集団意識—共存する「宗族」・「角頭」・「大隊」では、1) 農村の始祖を中心とした父系的な系譜関係によって広範囲の人々をつなげる宗族組織の中に自らの位置を求めることで、自らを宗族の歴史の中に位置づけようとする連家船漁民の姿と、2) 根拠港を同じくしながら、比較的浅い深度しか持たない祖先を中心として、父系の血縁的なつながりによって連家船漁民を結びつけていた角頭と呼ばれる同姓親族集団を通して、農村

に広がる宗族の歴史の中に自らの位置を求めようとする連家船漁民の姿、3)連家船漁民たちのみから成る角頭の集団の内部に自らの位置を確認しようとする連家船漁民の姿、そして、4)従来、地縁的・血縁的なつながりによって連家船漁民たちを結びつけていた漁船幫や角頭の範囲を超えて、新たに現れた漁業大隊という集団の中に自らを位置づけることで、地域社会における自らの位置を確認しようとする連家船漁民の姿について注目する。

1)に関しては、15 世代以上という長い時間にわたって船で生活し続けてきたことを自認する連家船漁民たちが、その一方では自分たちが集団化以前に根拠地としていた港のある農村の農民との間にある宗族関係を辿り、そもそも自分たちは農村の出身であると主張する姿に注目する。ここからは、長い時期を経て幾度も中断や変更を余儀なくされてきたはずの各房共同で行われる祖先祭祀への参加や、具体的な日常生活の営みの中で繰り返されてきた口伝といった、一見すればきわめて不確定性の高い方法を通して、農村に暮らす農民たちとの間に「同じ宗族の一員である」という集団意識を築き上げ、それを上の世代から下の世代へと伝えることが可能になってきたことがわかる。

こうして農村の始祖を中心として各地に広がる宗族組織の全体像をより詳しく把握するのは、連家船漁民の中でも、年に 1~2 回、農村の始祖の家廟を訪れて、宗族組織全体を代表する形で行われる祖先祭祀に参加する資格を持つ、世代が上の者に限られている。いわば、宗族全体の歴史をより深く理解する立場にある彼らが、そうした知識をどのように下の世代へと伝えることを可能とするのが、2)の角頭内部で行われる祭祀の場であった。ここからは、近接した根拠港を用いるという地縁的なつながりによって連家船漁民たちを結びつけていた漁船幫という集団の中にあって、比較的浅い深度しか持たない祖先を中心として、父系の血縁的なつながりによって連家船漁民を結びつけていた角頭と呼ばれる同姓親族集団によって行われる角頭庇の祭祀が、宗族全体の中で自分が何世代目に当たるのかについて、成員たちが不断に確認する場を提供していること、そして、上の世代の者が自らの知り得る範囲の宗族の歴史について、下の世代へと伝える役割を担ってきたことが理解できる。すなわち、角頭という同姓親族集団は、日常的には個々の家庭ごとに船に乗り、分散して漁をしたり、漁獲物を運んだりするといった生活を送る連家船漁民たちと、農村の始祖を基点としながら父系的な系譜関係によってきわめて広い範囲の人々を結びつける宗族組織との間を橋渡しするような働きをしていたと考えられる。農村に広がる、いわば大きな組織の中へと自らを同化させていく志向性を持つかに見える角頭庇祭祀というのは、その一方で、存命の最も世代の上の者から見て 3~5 世代上の祖先を同じくするという連家船漁民のみで構成される角頭内部の関係性を強固にしながら、庇公に対してその成員全体の庇護を願う場としての役割も、持ち続けてきた。

根拠港のある農村社会との密接なつながりを保ちながら、基本的には家庭ごとに船に乗り、九龍江河口に分散して漁や漁獲物の運搬などに従事していた連家船漁民たちにとって、農村の宗族組織という巨大な組織を除けば、自らを位置づけて考える集団のうち、最大の単位となっていたのは、近接する根拠港を用いる複数の同姓親族集団、複数の作業グループから成る漁船幫であった。1990 年になって漁業生産大隊全体を庇護する庇公(神明)が登場したこ

と、それを機にはじめられることになった五月節(端午節)の一連の儀礼からは、連家船漁民たちが従来の角頭や漁船幫という血縁的・地縁的な関係に支えられていたつながりを超え、より大きな範囲の中で、「われわれ意識」を築くことが可能になってきたことがわかる。各漁船幫を超えたより大きな範囲の連家船漁民を結びつける、こうした「われわれ意識」というのは、現在はSm 漁業社区へと名称を変えた行政単位に所属する人々が、近隣の市街地や村の人々に相対する時に、自分たちのことを「漁業大隊的」(漁業大隊の者)と呼ぶことからわかる。

1)～4)のように、いくつもの異なる方向性を持った社会的紐帯への所属意識は、対立する形ではなく、連家船漁民たちの中に重層的・同時代的なものとして存在している。すなわち、「自分の祖先は農村である〇〇村の出身であり、〇〇村の始祖から数えて何代目である」ということと、「自分は△△漁船幫に由来する××姓の成員である」ということ、そして、「自分は漁業大隊の成員である」というように、異なる種類の集団に対する所属意識が、政治的な変化や生業のあり方の変化の中にありながら、歴史的な時間軸の上で次から次へと塗り替えられてきたという訳ではなく、現在を生きる連家船漁民たち一人一人の中に、同時代的に存在していると捉えることができる。

大きな変化を経験した後の現在にあって、かつて連家船漁民たちと陸上に暮らす農民たちや市街地の人々との間を隔てていた数々の文化的差異というのは、実際のところ、その姿を消すことになったのだろうか。たとえば、葬送儀礼の内容を詳しく見てゆくと、死者の遺体に触れる行為のほとんどを土公仔と呼ばれる葬儀専門職に任せようとし、それが孝、すなわち親孝行であるとする周囲の農村や社区に暮らす人々と、そうした行為をすべて死者の親族の手で担うことこそが自分たちにとっての孝であるとする連家船漁民たちの間にある大きな隔たりについては、自分たちの方法のほうが農民たちのそれよりも優れているのだと自負する連家船漁民の態度を見出すことができる。ここからは、自分たちと陸上に暮らす人々との間に依然として横たわる民俗事象の差異と、何を孝と見なすのかという考え方の差異を冷静に見つめながら、自らは農民とは異なるものの、その差異は一方的に陸上の人々から蔑視され得るようなものなどではないのだと主張する連家船漁民の姿が浮き彫りになることがわかる。

また、連家船漁民たちの間に見られる祖公観の二つの大きな特徴からは、数多く存在するはずの自分に関わる死者の中から、族譜、位牌、墓碑といった文字記録がなければ担保され得ないような厳格な条件を満たす死者のみを選び出すことで、それを祖先として認めてゆくという一般的な漢族の間で共有される祖先観などは、そもそも連家船漁民たちにとって、さほど大きな意味を持っていないことが確認できる。それよりも、彼らにとっては、日常生活の中で築かれた個々の人間関係に基づく緩やかな条件によって、祖公とは誰かを決定してゆくことのほうがよほど重要なことは明らかであり、こうした祖公観の基礎には、陸上に暮らしてきた農民や市街地の人々とはまったく異なるような、船上における死の危険と隣り合わせの生活そのものが反映されていることが了解されるのである。

第4章 「連家船漁民の眼に映る陸上の人々との差異—葬送儀礼と『祖公』をめぐる理解」では、船上から陸上へと生活の拠点を移した後の現在でも依然として、連家船漁民たちと周囲

の農村や市街地に暮らす人々との間には、葬送儀礼や祖先祭祀をめぐる大きな差異が存在していることに注目する。たとえば、葬送儀礼の内容を詳しく見てゆくと、死者の遺体に触れる行為のほとんどを土公仔と呼ばれる葬儀専門職に任せようとし、それが孝、すなわち親孝行であるとする周囲の農村や社区に暮らす人々と、そうした行為をすべて死者の親族の手で担うことこそが自分たちにとっての孝であるとする連家船漁民たちの間にある大きな隔たりについては、自分たちの方法のほうが農民たちのそれよりも優れているのだと自負する連家船漁民の態度を見出すことができる。ここからは、自分たちと陸上に暮らす人々との間に依然として横たわる民俗事象の差異と、何を孝と見なすのかという考え方の差異を冷静に見つめながら、自らは農民とは異なるものの、その差異は一方的に陸上の人々から蔑視され得るようなものなどではないのだと主張する連家船漁民の姿が浮き彫りになることがわかる。

祖先祭祀については、紛失したら新たに準備するということを繰り返しながら現在まで伝えられている香炉と、比較的高い頻度でその場所が忘却されてゆく墳墓、ごく最近になって登場した遺影を除けば、農民たちや市街地の人々の間では一般的に保持されているはずの死者個人を記念するためのツール、たとえば族譜の記述や位牌、墓碑といったものが連家船漁民に伝えられていることはほとんどない。それによって、遡ることができる「祖公」(祖先)が2～5世代上までに限られるという世代深度の圧倒的な浅さと、血縁関係でつながることもなく、同姓父系親族の範疇に入ることもない死者、さらには異常死を遂げた死者をも祖公として認めることができるという緩やかな祖公の条件を持つことが、依然として連家船漁民たちと農民や市街地の人々との間を隔てる特徴であり続けている。この祖公観をめぐる二つの特徴からは、数多く存在するはずの自分に関わる死者の中から、族譜、位牌、墓碑といった文字記録がなければ担保され得ないような厳格な条件を満たす死者のみを選び出すことで、それを祖先として認めてゆくという一般的な漢族の間で共有される祖先観などは、そもそも連家船漁民たちにとって、さほど大きな意味を持っていないことがわかる。それよりも、彼らにとっては、日常生活の中で築かれた個々の人間関係に基づく緩やかな条件によって、祖公とは誰かを決定してゆくことのほうが重要であり、こうした祖公観の基礎には、陸上に暮らしてきた農民や市街地の人々とはまったく異なるような、船上における死の危険と隣り合わせの生活そのものが反映されていると見ることができるだろう。

これらの事例から導き出されるのは、自分たちの存在や自分たちの慣習が、農村に暮らす農民たちや市街地の人々をはじめとする他者からは常に奇異の目、あるいは侮辱の眼差しで見られていることを身に染みて感じる一方で、連家船漁民たち自身は、そうした差異を「異質なもの」「奇怪なもの」と捉えようとする(研究者をも含む)社会的・文化的マジョリティの眼差しに完全に屈している訳ではないという重要な事実である。彼らのそうした姿に注目することこそ、研究者である私たちに、「社会的・文化的マジョリティである陸上の人々の前では、連家船漁民たちというのは常に一方的に社会の周縁へと位置づけられる、弱きマイノリティであり続けるほかない」という得体の知れない、それでいて、とてももつともらしい仮定から離れる契機を与えてくれるものにほかならない。

第Ⅲ部「水上／陸上のはざまで」の第5章「移動を続ける連家船漁民の暮らし」は、連家船漁民たちにとっての水上／陸上の境界性について、具体的に検討する部分である。九龍江河口から台湾海峡にかけての水域において、漁撈や漁獲物の運搬に従事したり、福建省よりも南西に位置する広東省や広西チワン族自治区の河川へと出かけて砂の掘削作業に従事したりというように、改革開放後の現在でも水上での仕事に就く連家船漁民たちにとって、その移動生活というのは、複数の国家の領海を股にかけて活躍するバジャウたちのような東南アジアの海洋民たちほど大規模なものでもなければ、取り立てて大きな利益を生み出すものとなっている訳でもない。それにもかかわらず、依然として船での移動生活を続ける連家船漁民たちが大多数を占めているという事実は、何を意味するだろうか。

研究者たちがしばしば、一口に「船での移動生活」という語で呼び表わしてきたものの中には、船上生活者たちが置かれた自然環境や社会的・文化的背景によって、1)ある場所を基点として、様々に異なる周期で別の場所とその基点の間を移動するものと、2)ある場所を基点とするようなことはなく、島や漁場を次から次へと変えて、元いた場所へと戻ることを目指そうとしないものという二つの形がある。連家船漁民たちにとっては、この 1)のほうが馴染み深い移動の方法である。つまり、基本的には親族関係で結ばれた農民の暮らす農村にある根拠港から出発して、1週間～3ヶ月ほどの間は漁場へと行ったままとなり、それを1日周期で考えれば、出漁先の近くに定める停泊地点と漁場の間を往復したりするといった移動生活が見られる。

各地域で異なる種類の移動生活を見せながら、近代化の影響を受けて、ほとんどの地域でこうした船上生活者は陸上に何らかの形で陸上ガリを遂げていくことになった。こうした時に研究者やそれが政策的に進められる場合には国家などによって暗黙裡に前提とされるのが、陸上に住居を獲得しさえすれば、いとも簡単にその陸上への定着や定住が進んでゆくというものであり、その結果として現れる「移住から定住へ」という図式もまた、そうした前提に貫かれている。これは、時に前者から後者への移行が不可逆的になされるという認識と相俟って、現実をよりわかりにくいものに見せてしまう。

実に労働人口の77%を超える連家船漁民が現在でも水上労働に従事し、陸上で育った経験しか持たない若年層の中にも、両親の後を継いで漁船での移動生活へと慣れ親しみ、最終的には漁船を譲り受けて独立した形で漁業を成り立たせてゆく者が多いことは、つまり、水上の世界が一方的につらく、貧しく、悲惨なものと認識している訳ではないことを示している。そこから見えるのは、水／陸という二つの世界の間に、それほど明瞭な境界を設けずに、境界をいとも簡単に乗り越えながら、どちらにも跨った生活を営もうとする人々の姿である。

そもそも、連家船漁民／農民・市街地の人々・一般的な漁民という両者の間に、陸上に土地や厝を持つか否か、あるいは人生の大半の時間を家族とともに船上で過ごすか否かといったことを指標としながら、明瞭な境界線を引いてきたのは、連家船漁民の側ではなく、それ以外の(研究者も含めた)他者であった。これに対して、連家船漁民の側は一貫して、「自分たちは討海人・掠魚人(漁民)である」といい続けてきたのだが、この言葉を借りるならば、連家船漁民たちにとっては、「陸上に住居を獲得しようがしまいが、自分たちは今も昔も、水・陸のはざま

を生きる討海人・掠魚人であり続けている」ということになるだろう。

「水／陸のはざまで生きる」とは、単に連家船漁民たちが住居を陸に得ながら、漁を続けているということを表すだけの言葉ではない。連家船漁民たちは、陸上の人々から侮蔑的な名を与えられ、経済的に劣位に置かれてきた一方で、定住用の住居を得るよりもずっと前から、陸上の世界と切っても切れない関係性を築いてきた。それは、水を貰ったり、船を含む生活必需品を手に入れたり、魚を売ったり、そして農村から子女を買い入れて育てたりといった日常的关系性でもあり、同時に、農村の同姓父系親族の農民たちとともに始祖を祀りながら、同じ宗族組織の一員であるとの意識を作り上げるといような半ば観念的な形をとるような関係性でもある。近年では、農村や市街地の人と結婚して、子育てをめぐって姻族との間に大きなネットワークを広げる連家船漁民の姿も見られる。陸上に住居を得た後で、陸上に労働の場を得て、水上での仕事には関わらなくなった人々も、角頭疋祭祀や祖先祭祀に参加することを通して、自分たちよりも上の世代の人々が船上生活の中で築いてきた角頭の関係性の中に自らを位置づけようとしたり、船上生活の痕跡を色濃く反映した複雑な親族関係を受け容れようとしたりしている。さらに、五月節の儀礼は、陸上で働くようになった人々が、五月節の儀礼に参加することを通して、もはや自分にとっては生業・生活の場などでなくなった水上の空間さえも、自らの空間として見なそうとする際の重要な場として働いている。いずれにしても、連家船漁民たちは、長らくの間、きわめて具体的な経験を積み重ねながら、水／陸のはざまで生きてきた、そして、現在もそのはざまで生きているということになるだろう。

水／陸の間に必要以上に境界を見つけ出そうとしているのは、見る者の視点に立ちたいとどこかで願っている私たちのほうなのかもしれない。その境界領域をまさにジグザグと縫うように歩き続けてきた者にとって、そこは、境界であって境界ではないような場所なのである。